

【事例報告】

学生ボランティアの実態 ～一人一人の“点”を“線”につなぎ、つむぐ活動～

西南学院大学ボランティアセンター事務局 副課長

山口由美子氏

ただ今、紹介していただきました 西南学院 総務部 キリスト教活動支援課 ボランティアセンター事務局の 山口由美子です。どうぞよろしくお願いいたします。

西南学院大学のボランティアセンター(通称:西南ボラセン)は、東日本大震災を機に2012年7月に開設されました。「西南よ、基督に忠実なれ」建学の精神の具現化、ボランティアを大学の社会貢献の1つとして、学生や教職員に推進しています。

東日本大震災、熊本地震、九州北部豪雨災害などの被災地支援活動の他、さまざまなボランティア活動があります。

西南ボラセンでは、あらゆるボランティアに関する「情報収集」「情報発信」「マッチング」を行っており、「学生と活動をつなぐ」「学生と学生をつなぐ」「活動と活動をつないでいます。

まずは、2011年3月11日に発災した東日本大震災のボランティア、西南学院大学では、大人数で一気に活動に行くのではなく、「細く長い支援を行う」という方針をたて、継続して活動し、現在までの8年間で、79チーム629名の学生教職員が、東北で活動しています。

2年前の熊本地震。発災して2週間後のGWに、熊本市災害ボランティアセンターの本部運営スタッフとして、その後、被災地NGO協働センターとの連携のもと、毎月西原村で活動しました。

同時に、西南学院大学では、NPO法人ANGEL WINGSと北九州市立大学と一緒に協議体「ふくおか学生熊本地震支援実行委員会」を立ち上げ、助成金をいただきながら、福岡県内の大学生に呼びかけ、とりまとめ、一緒に活動しました。

熊本地震における被災地支援は、この2年間で15チーム170名の学生教職員が現地で活動いたしました。

昨年九州北部豪雨災害が発災後、西南学院大学では、2016年度に1年間熊本支援を一緒にしてきたANGEL WINGSと北九州市立大学、久留米大学と共に、すぐに「福岡学生災害支援実行委員会」を立ち上げ、さらに行政である福岡県が加わり、「大学生災害ボランティア支援センター実行委員会」を立ち上げ、全国からボランティアに駆けつけてくれる大学生のための無料宿泊拠点及び情報共有・情報発信の場として、「うきはベース」を開設しました。

被害が大きかった地域に隣接している「うきは市」の全面協力のもと、学生の夏休みの60日間は、「うきはベース1st」として、毎日活動を行いました。

本学からはもちろん、北海道から鹿児島まで、全国から大学生が駆けつけて活動し、大学生同士の交流も深めました。うきはベースの活動は、学生たちが施設の大掃除やゴミ箱・周辺Map作りなど、環境整備から始めました。

一日のスケジュールやルールなども学生たちが話し合って決めました。

毎晩実施するミーティングのプログラム『宣言シート』も決めて実行しました。

8月中旬には学生リーダーが誕生し、学生主体で引き継ぎ取りまとめてくれました。

朝、子どもたちや地域の方々と一緒にラジオ体操をして施設周辺を清掃することも自主的に始めました。

夜のミーティングでは、新規参加者の紹介を含めた交流をはじめ、各自の活動の振り返り、翌日の活動に向けた情報共有はもちろん、支援の在り方など、さまざまなテーマで語り合いました。

ボランティアの受入先との調整、参加者募集・受付・災害支援に関する情報提供などは実行委員会がサポートし、委員のメンバーが交代で当直し、学生たちの活動を支援しました。

夏休みが終了し後期が始まってからは、場所も移動し、週末の土日を中心に「うきはベース 2nd」として、

現在も活動しています。「2nd」の活動では、「福岡県」は助成金を出す後方支援側となり、「松末さいこプロジェクト」を展開しました。

被害が大きかった朝倉市杷木地区にある松末小学校、皆さんもメディアなどでご覧になった方もおられると思います。

災害が起きる前の 2018 年 3 月末で、小学校(杷木・志波・久喜宮・松末)統廃合が決まっていた松末小学校は、豪雨当日、全校児童 27 名のうち、半数は、家庭からのお迎えが間に合わず、子どもたちは、恐怖の中で、先生や地域の方々と一緒に、3 階の教室で一夜を過ごしています。

校舎には大量の土砂が流れ込み、体育館には 2 メートル近く堆積しました。

3 月で閉校される学校ではあるけれど、6 年間過ごした学び舎で 6 年生の卒業式をあげさせてあげたい、最後の閉校式を小学校で開催したいという地元の方々の想いを受けて、うきはベース 2nd では、地域や NPO の方々と協力しながら、小学校の土砂の撤去作業や清掃を中心に作業しました。

泥出し作業が落ち着いたあとは、松末校区最後の文化祭を手伝ったり、松末コミュニティの方々と交流しながら活動しました。

3 月 24 日には、約 500 人の卒業生や地域の方々が集まる、松末小学校のお別れ会を支援し、子どもたちや参加者からの歓声に励まされました。

現在も月 2 回週末に活動していますが、うきはベース 1st と 2nd、合計すると、100 大学を超える約 1900 名の大学生が活動したことになります。

西南の学生たちも、両方を合わせて、436 名が活動しています。

昨日今日も、杷木の志波や松末地区で、学生たちが活動しています。

学生たちは、「うきはベース」まで来れば無料で宿泊できるだけでなく、情報を得て活動につながり、たとえ一人で参加しても全国の学生と交流することができました。

その拠点からネットワークは広がり、全国の仲間と連絡を取り合い、リピーターとして再び同時期に活動する姿もたくさんありました。

被災地支援への使命感だけでなく、仲間たちとのつながりを楽しみながら喜んで活動し、成長していく学生たちの姿は、私たち活動をコーディネートする運営スタッフにとっても大きな励ましとなり、喜びとなりました。「うきはベース」の取り組みに対しては、うきは市だけでなく企業や団体の方々から、あらゆる形で支援していただきました。

さまざまな支援の形があることを実感し、あらゆる思いが実現した活動となりました。

運営側も、行政と NPO 法人と大学が連携・協働し、それぞれに役割分担しました。

NPO は現地関係者とのネットワークづくりや的確なコーディネート。

大学は、学生募集や指導、大学関係者に向けての発信やコーディネート。

「福岡県」が予算を確保し、広報や募集受付など、うきはベース 1st の事務局を担ってくださったので、信頼度が増し、全国の学生たちがネット検索で情報を得て活動に参加する際に、安心して一步を踏み出すことが可能となりました。

そして、活動の中心となった学生たちは、自らが SNS で情報を発信し仲間を集め、過去の参加者にも活動報告し、メディアにも登場し、各大学でも写真展やイベントなどで活動を伝え、一人ひとりが広報の役割を果たしてくれました。

学生たちは環境さえ整えば、自分や仲間の体験から学び、お互いに成長し、新たな活動へつながることを示してくれました。

NPO、行政、大学、そして学生たちのすべての力によって実現し、学生たちの可能性が大いに引き出されたのが、「うきはベース」プロジェクトでした。

◎海外ボランティア

西南学院大学では被災地支援の他にも様々な活動をしているのですが、その一つが海外ボランティアです。ボラセンが開設される前から宗教部主催で始まったフィリピンの貧困地域での海外ボランティア・ワークキャンプは、今年プログラムで17年目となり、266名の学生教職員が現地で活動しました。

西南独自のプログラムでは、フィリピンでも東北でも、毎晩夜に、「西南タイム」というミーティングを実施します。毎晩、お互いを感じた事などを話し合うことで、さまざまなことに気づき、学生たちの中に変化が生じ、大きく成長いたします。

11日間のプログラムの中で、価値観、人生観、世界観、宗教観を根底からゆさぶられる体験をします。普段、学生たちは、自分の気持ちや想いを伝え、語り合うことが少ないようです。

活動では、寝食を共にし、共に汗や涙を流し、毎晩語り合う時間を持つことで、自分のマイナス部分も含めて、素直に話ができる関係性を築くようになります。

さらに、貧しい中で、子どもたちや現地の方々が、輝く笑顔で楽しそうに過ごしている状況をみて、「本当の幸せとは何か」「感謝する心」を見つめるようになります。

毎年、空港に送迎するのですが、帰国時に、成長して、すっかり雰囲気が変わった学生たちの姿を見て、本当に励まされています。

その他、個人で参加する海外ボランティアに補助金を支給する活動も行っています。

福岡県や近郊のNGO団体と連携し、毎年、学内でNGO合同説明会を開催して、学生たちが「はじめの一步」を踏み出せるような仕組みを作っています。

今年の夏休みは、モンゴル、カンボジア、フィリピン、ネパール、中国などで48名が海外でボランティアをしました。個人ですべてを手配し、団体によっては、現地で他大学のメンバーと合流し、交流しながら活動しています。

このプログラムに参加する学生たちも、海外の活動で様々な試練にあいながらも、それぞれが乗り越えて自信をもつようになっています。

頼もしく成長した学生たちから、帰国後に報告を受けることを毎回楽しみにしています。

西南学院大学のボランティア活動で大切にしていることが二つあります。

まず一つ目は、

「一人ひとりの点をつなぎ、つむいでいく」活動です。

学生たちには、「自分の点を打って、次の誰かにつないでいこう」と伝えています。

一人ひとりの働きは小さくても、たくさんの点が集まり、つながり、つむがれて、線になり、面へと広がっていくこと。

東北やフィリピンなどへの想いが募っても、学生たちは遠方である現地まで何度も行く事は難しいです。活動は、すべて一人で担う必要はなく、自分の点を打って、次の誰かにつなぐことを大切にすることを伝えています。

次の誰かが想いを受け取って行動することで、活動はつながれ、つむがれていくのです。

また、自分が感じたこと、学んだことを「伝える」ことも大切です。自分が体験したことを言語化して伝えることで、経験値が増えます。

他の学生の体験したことを「聴くこと」で、自分との考え方や想いの違いを知り、学ぶことで、視点が広がります。

活動が「点」から「線」「面」へとつながっていくだけでなく、学生自身の体験も「点」から「線」「面」の経験へと紡がれていくのです。

さまざまな出会いにより成長する学生たちの姿が、ボランティア活動の中にたくさんあります。人との出会いや、つながることの楽しさ、すばらしさを、学生たちに体験してほしいと願っています。

西南ボラセンが大切にしている2つ目は、自分の環境を「当たり前」だとせず、感謝して「ありがとう」を伝えること。そんな活動を大切にしています。

さまざまなボランティア活動をすると、自分の状況が「当たり前」ではないことに気がつきます。

例えば、「被災地支援活動」。

昨日まで普通に生活していたことが、一晩の雨や地震で生活が一変してしまいます。海外の貧困地域で活動すると、お湯のシャワーが、そして、毎日食事できていることさえも「当たり前」ではないことに気づきます。

海外だけではなくありません。日本でも、福岡市でも、「子ども食堂」の活動など、「子どもの貧困」問題に直面すると、「大学で勉強できていること」「部活やサークル、アルバイトができること」「生活すること」「食事できていること」一つひとつが「当たり前」ではないことに気がつきます。

皆さんは、「感謝」の反対語について、考えたことがありますか？

「感謝」の反対語は「当たり前」です。

当たり前と思っていることに、感謝の気持ちは起きません。

学生たちは、ボランティア活動で「当たり前」でない日常生活に気がついた時に、周囲に「感謝」の気持ちを抱き、「ありがとう」と伝えるようになります。

また活動先、特に被災地では「ありがとう」と言われたことによって、生きる希望が湧いたというエピソードをよく聞きます。

岩手県の大槌町にある小鎚第4仮設住宅では、毎回私たちが活動に行くたびに、ご馳走を作って待っていてくださり、心のこもったおもてなしをしてくださいます。

2011 年の秋、学生たちが寒い戸外で行った活動は、仮設住宅で初めて迎える冬を乗り越えるために、少しでも寒さをしのげるようにと、プチプチの緩衝材を窓に貼る作業でした。

寒い外で、みんなが一生懸命作業をする姿を見た仮設の方々は、コーヒーや牛乳を集めて温かいカフェオーレを作って振舞ってくださいました。

学生たちは、どれだけ貴重な食材を提供してくださり作られたカフェオーレかが分かっていたので、「美味しい、美味しい、ありがとう」と涙を流しながら飲みました。

その姿を見た仮設の方々は、希望を見出し、元気になりました。

それまで、仮設の方々はいつも、ボランティアの人たちに対して、「ありがとう。すまないね、申し訳ないね。」と言っていました。そんな毎日の中で、若い学生たちは「ありがとう」と言ってもらえることにより、とても励まされたのです。

その時以来、その仮設住宅では、訪問するたびに、ご馳走を作って待っていてくださり、おもてなしをしてくださるようになりました。

人は、「ありがとう」というだけでは生きていけないそうです。

「ありがとう」と人から言われることにより、元気が出て希望を見出し励まされるのです。

「ありがとう」は魔法の言葉です。

私たちが「ありがとう」という言葉を発する時、それを聞いた誰かが、私たちの知らないところで、勇気付けられ、元気になり、励まされて、生きる希望を見出しているかもしれません。

だから、西南ボラセンでは、学生たちをボランティア活動に送り出す時に「たくさんのありがとうを、一つでも多く、伝える活動をして来てね」と伝えています。

今年の夏の東北の活動では、事前研修で、文字に満面の笑顔を描く「笑い文字」を習得して、現地の方々に、「ありがとう」と伝えることに加え「ありがとう」の笑い文字を届けてきました。

集会所で、一緒にポストカードのフレーム作りをしたあと、最後に学生たちが自分で書いた笑い文字を渡したら、皆さんが「ばあっ」と満面の笑顔になりました。

フレームを作っている時には、「お孫さんやペットの写真を入れよう」と話されていた方々が、最後の集合写真を写す時には、全員、学生たちから受け取った「ありがとう」の笑い文字ハガキに入れ替えてくださっていました。

学生自身も、「ありがとう」を伝えて渡して喜んでいただくことで、自尊感情が高まり、自己肯定感を増すことができます。夏の活動では、その状況を目の当たりにすることになりました。

学生たちは、「ありがとう」は、ボランティア活動の現場だけではなく、自分の身近なところで、家族にも、友人にも、周囲の方々にも必要な言葉であることに気がつき、活動後、「ありがとう」をたくさん伝えるようになっています。

学生たちは、様々な体験や出逢いによって、成長していきます。

数日間の活動の中で学生たちが大きく変わっていく姿に立ち会うことができるボラセンで、私自身もいつも励まされ、勇気づけられています。

毎日、感謝の日々を過ごしています。

本日は、学生たちの活動を聴いてくださり、ありがとうございました。